

地域資源を人の営みの蓄積として伝えていく

近年、地方創生や多拠点居住、関係人口といった言葉がすっかり浸透し、地方との様々な関わり方が広がっている。訪日外国人旅行者数に目を向けても、令和6年(2024年)の3,687万人はCOVID-19流行前の令和元年(2019年)の3,188万人の水準を超え、歴代最高である。かく言う筆者も、愛知県名古屋市の大学で教鞭を執る傍ら、長野県塩尻市で二拠点居住をしている。長野県塩尻市では小さな法人を設立し、中山道でも代表的な観光地である奈良井宿にて、職人が手がけた一点物を販売する小売店等を経営し、訪日外国人旅行者の動向、都市や地域との関係について実際に体験している。本稿では、現場の状況も踏まえつつ、複数の学術分野からの視点を交えて筆を進めたい。

さて、観光や移住、日本人や外国人等、様々な人々がそれぞれの目的を持って地方を訪れるが、彼らは一体何を目的としているのだろうか。それは、自然が生み出す風景、地域特有の歴史、文化や風土等であり、今号の特集の総論で寄稿されている「インフラツーリズム」も選択肢の一つであろう。多様な目的に何かしらの共通項を見出せないかと思案したところ、必ず人が関与している、という点において、筆者はある種の納得感を得ることができた。

我々の目の前に広がる風景には、実は全てに何らかの理由がある。その地に住む人々が、暮らしを営むために住環境を改善してきた事実の蓄積が、我々の世界を形作っている。人類が火を使った時から環境汚染は始まったとも言われているが、人

がその地に住む限り、何らかの環境の変化が生じる。一方、米国のナショナルパーク(国立公園)や日本の世界自然遺産など、人間が介入しない手付かずの自然も非常に大切であるが、国土の大半は何かしらの形で人間が介入したものであり、そのような視点から地域を捉えると過去から現代に至る様々な人々の物語が見え隠れする。我々は、人間と自然、地域との関わりでの営みの蓄積を文化と捉え、地域資源として魅力に感じているのである。

筆者は日本全国の集落を研究しており、先人の知恵に学びながらこれからの地域活性化やまちづくりについて考究している。主たる研究対象地である三陸沿岸漁村の研究では、東日本大震災からの復興を、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ津波、東日本大震災と、複数の津波からの復興として捉え、過去の津波被害の履歴を探索する調査を続けている。注意深く観察すると、人々の営みの蓄積が見え、そうした文化蓄積から未来に向けて学ぶことは多い。学生とともに集落を練り歩くと、やはり、彼らの心に響くのは、その地で歩んできた人々の創意工夫であり、大変な経験や悲劇を受けたまちの人や文化の消失である。

人々の創意工夫や文化の蓄積は当たり前のものとして認識してしまいがちであるが、「観察」することによって「認識」できるようになり、その結果、心に刻まれる。当たり前の日常が、視点を変えると一気に興味深くなる。「観察」に関する学術・社会的な蓄積を見ると、民俗学の父と呼ばれる柳田國男の昭和初期の日本全国と大陸の調査、柳田門下生の今和次郎による関東大震災後のバ

名城大学 理工学部 准教授 ^{さとう}佐藤 ^{のぶたけ}布武



ラック観察などが有名で、戦後になると作家の赤瀬川原平や建築史家の藤森照信らによる路上観察学会が立ち上げられる。いずれも日常生活の中の人の営みを観察するもので、少なくない人の心を動かしている。近年では、地域の背景を知ることでもちをより魅力的に編集するテレビ番組「ブラタモリ」や、隠されてしまった過去の人々の営みを解明する書籍『暗渠マニアックス』も刊行されている。また、日本全国で地域の魅力を伝えるまち歩きも盛んである。このように、街の風景を人々の営みの蓄積として捉えると、日本全国どこにでも魅力はあるし、地域活性化へのヒントが多く潜んでいる。

人々の営みは、現代から見ると文化や歴史として捉えられ、それらを継承するために、文化財保護法や世界遺産という制度も存在している。しかし、このような確固たる基準を持つように見える文化財保護法でさえ、時代の変化に対応して何度も法改正が行われている。同法は、戦後の混乱の中急速に失われる歴史や文化を保護するために制定された。そこから時を経て保護の範囲が徐々に広げられ、平成30年（2018年）には、保護に加えて活用も促すように法改正が行われた。また、世界遺産の基準も時代とともに変化しているが、世界遺産の分野で決して変わらない指標として、真正性（オーセンティシティ）という概念が存在している。これは物事の本質や真実性を解き明かそうという視点で、人間社会において非常に大切なものを見定め、継承していくための評価基準である。

ここまで自由に論を進めてきたが、そろそろ筆を置くこととしよう。結局のところ、地域活性化とは、それまでの人々の歩みに敬意を払い、地域にとって大切なものを将来に継承することである。そうした視点から観光資源を捉えると、訪れた人々に風景の奥に眠る地域の蓄積を伝え、応援してもらうことに観光の本質がある。インフラツーリズムとは、そのような文化の蓄積の最たるものであり、人々の営みの根幹を作るもので、その醍醐味は、その地域を支えてきた合理性を伝承することにあるのではないだろうか。

現代は多様性の時代である。同時に、自然と人間が仲良く暮らし続ける方法論が必要とされている。これまでの自然支配や人類至上主義ではなく、共生社会に移行する際に、我が国が育んできた自然観や宗教観に学ぶことは多い。インフラツーリズムが伝える自然との共生のあり方や人々の歩みの紹介は、地球環境を大切にするこれからの社会への知見を多分に含んでいる。

今号ではインフラツーリズムのみならず、概念を拡大する多くの事例に出会うことができる。地域の文化をきちんと伝え、共有し、まだ見ぬ未来に向けた可能性を提示する。そのような過去から現在、そして未来につながる人間の物語に出会える大きな存在としてのインフラツーリズムの展開に期待したい。

【著者紹介】佐藤 布武（さとう のぶたけ）

平成23年千葉大学工学部デザイン工学科建築系卒。平成28年筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻博士後期課程修了。博士（デザイン学）。筑波大学芸術系・世界遺産専攻助教を経て、平成30年より名城大学。令和5年より現職。集落研究を専門とし、建築設計やまちづくりの実践研究を行う。